

# ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.3 2009.7.18

## 女性がさきえた養蚕



「養蚕神掛軸（部分）」（個人蔵）

手に桑の葉、繭、生糸を持っている。

今、カイコを見たこともない、知らないと言う若い人たちが大勢います。しかし、50年ほど前まで、安曇野では養蚕は当たり前のように営まれていました。1年のうち5回もカイコを飼う農家も珍しくありませんでした。カイコを飼うために家中の畳をあげ、家中をカイコに占領され、カイコを飼う棚の間で寝る生活だったという人も少なくありません。また、その頃の安曇野はカイコの飼料となる桑を確保するために広大な桑園が作られ、現在、私たちが見ている風景とは違う景観が広がっていました。

やがて時代が移りゆく中、さまざまな要因から養蚕は次第に衰退し、安曇野で養蚕を営む農家はなくなりました。桑園も水田や果樹園に姿を変えました。カイコとともに暮らした生活も忘れられつつあります。

残念ながら養蚕は安曇野から消えてしまいましたが、養蚕業が安曇野の人々の暮らしを支えた重要な産業であったことは確かです。その頃の暮らしの様子を、養蚕に携わった方々から聞いたお話から振り返ってみましょう。



### ◆◆養蚕業の普及◆◆

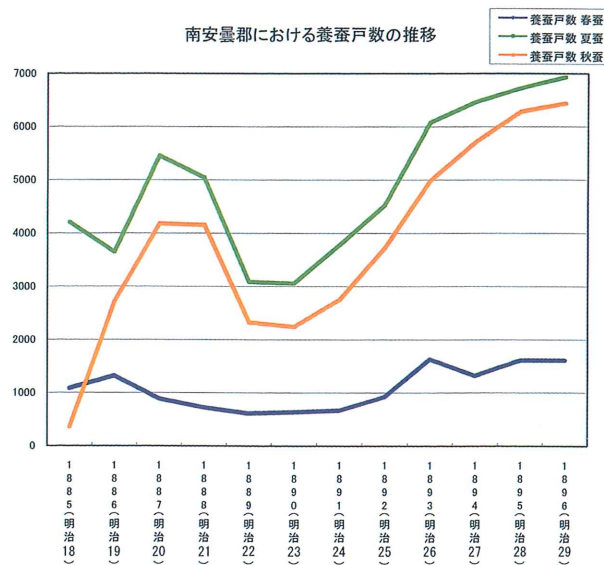
江戸から明治初期の養蚕 江戸時代、松本藩では桑を植えることを奨励しました。寛政3年(1791)には、女性たちにカイコを飼い、糸をつむぎ、機を織ることをご条目(法令)として通達しています。しかし、江戸時代から明治初期にかけて、養蚕は農業のかたわらやる作間稼ぎでしかありませんでした。

その後蚕種製造が盛んになった三郷温地区においても、明治11年(1878)の報告(『長野県町村誌 第三卷南信編』)では「男は農業を専らとす。女は農間に養蠶或いは紡織を業とす」とあり、蚕種の出来高も50枚にすぎません。また製糸場が一軒あったものの生糸の出来高も決して多くはありませんでした。

やがて、蚕種冷蔵技術の発達により、夏秋蚕の飼育が可能になると、安曇野でも急激に養蚕業が普及し始めます。

春の遅い安曇野では、桑やカイコが霜害に遭いやすい春蚕の飼育よりも、夏・秋蚕の飼育に適していたようです。

南安曇郡における養蚕戸数の推移



明治18年には秋蚕の飼育戸数が358戸だったものが、10年後の明治28年には6270戸まで増加しています。

蚕種業の発展 江戸時代に始まった安曇野での蚕種製造は明治時代後期になって大きく発展します。明治23年(1890)、南安曇郡の蚕種製造家は144名で、県内の他の地方に比べ多くはないものの、平均製造枚数では群を抜いており、大規模な製造家が多かったようです。

明治35年(1902)に安曇村稻核(現松本市安曇)の風穴を利用した秋蚕種の実用が可能になると、南安曇郡は小県郡と並んで、県下蚕種の二大産地となりました。



南穂高村(現安曇野市豊科南穂高)で明治中頃から大正初めまで秋蚕種製造業を営んでいた「大東館」の看板。



「藤守座」と書かれた幕。南安曇の秋蚕種製造業者が提供したものらしい。(年不明・個人蔵)

#### ●今回お話を伺った方々●

- Aさん：昭和2年生まれ(三郷・女性)実家では蚕種業を営み、嫁ぎ先では養蚕をしていた。
- Bさん：昭和10年生まれ(豊科・女性)実家で大規模に養蚕をしていた。
- Cさん：大正11年生まれ(三郷・女性)実家と嫁ぎ先で蚕種業を営んでいた。
- Dさん：昭和9年生まれ(堀金・女性)嫁ぎ先で養蚕をしていた。
- Eさん：昭和8年生まれ(豊科・男性)昭和31年より養蚕技術指導員として養蚕の指導をしていた。

### ◆◆カイコのいる暮らし①◆◆

掃き立ての頃 安曇野では養蚕は春蚕から始めて、夏蚕・秋蚕・晩秋蚕と、1年に3回から4回飼育するのが一般的でした。中にはその後、晩々秋・初冬蚕と飼う農家もありました。

「掃き立て」(カイコが種から孵化すること)から繭になるまで約1ヶ月間、農家はカイコとともに暮らします。

カイコを育てる場合、一番気を使ったのはケゴ(毛蚕)と呼ばれる稚蚕の飼育でした。温度と湿度管理に失敗すると、「イサン」や「チガイ」と言って、カイコが病気になり全部死んでしまうこともありました。



孵化したケゴ・蟻蚕(ギサン)とも言う。体長は2~3mm程度。

Bさんは、掃き立ての頃の飼育に特に気を使って、夜中でも温度と湿度を確認しに行っていたと言います。また、カイコは大事な「お客さま」だったので、一番のお座敷へお迎えしたとも言います。お迎えする前にはお座敷の畳をあげて、戸の隙間には障子紙で目張りをし、カイコに病気が出ないように、部屋も道具もすべてホルマリンで消毒したそうです。

「ホルマリンをポンプでおおるのを手伝わされた。中に入って消毒をしたのは父でしたが、マスクとメガネをしても目が痛くなった。田んぼのほうがずっと楽だった。」(Bさん)



蚕室消毒用のポンプ

### コラム①

#### 稚蚕飼育の道具

養蚕で一番気を使ったのが稚蚕飼育でした。温度は華氏75度(摂氏約24度)、湿度75%ほどで管理しました。稚蚕室がなく座敷などで飼育した農家は蚕座紙をつなぎ合わせて部屋の周りに垂らし、部屋の出入りにも気をつけたほどです。また夜中にも温度と湿度の確認をしました。



●催青器(左)

カイコの卵(種)に温度と湿度を与えて孵化させる道具。箱の下にコンロを置き暖める。箱の下側にトタン製の水盤があり、水を容れ蒸気を発生させ箱内の温度と湿度を調節する。

内部(右)には種紙を立てて入れる仕切りがある。



●蒸気発生釜(左)

蚕室の湿度をカイコの成育に適した状態にするための道具。中に水をいれてコンロや七輪で暖めた。

●養蚕用暖房器(下)

蚕室を暖める道具。中に練炭を入れて使った。外筒を上下して温度調節できるようにになっている。





### ◆◆養蚕は女性の仕事◆◆

女性の居場所としての養蚕 松本藩が奨励したように、養蚕をしていたのは主に女性でした。養蚕業や蚕種製造業を大規模に営んでいた農家は別ようですが、このことは、明治・大正・昭和と時が移っても変わらなかったようです。

Bさんが子供の頃、主に養蚕をしていたのは祖母だったそうです。祖母が養蚕の名人であったことや、カイコの世話、特にカイコが孵化したばかりの稚蚕の温度と湿度の管理が大変であったことから、簡単に嫁（Bさんの母）には任せられないし、子育てや田んぼで忙しい嫁を気遣っていたのだらうとBさんは振り返ります。

「母じゃなくて祖母がやっていたのは、母は田んぼもやって子育てもしていて大変だったからだと思う。母におかいかをやらせなかったのは祖母の思いやりだったんだね。私はしっかり手伝わされて、仕込まれたけど。」（Bさん）



蚕のヒキ拾い（三郷・昭和59年）  
養蚕農家はこの頃が最も忙しい

また、三郷の実家で蚕種製造をしていて、嫁い

だ後は養蚕をしていたAさんも、カイコを飼うのは女性の仕事だったと言います。実家では母が主になり、嫁いだ後は自分が主になってカイコを飼ったそうです。

では、男性はなにをしていたかという、田んぼや畑仕事をしたり、外へ出て働いていました。壮蚕（4齢から5齢のカイコ）の時は、桑が大量に必要なので、男性も一緒に桑を採りにいきましたが、カイコの管理をしていたのは女性だったようです。

一方、養蚕を任されていることで、弱い立場であった女性（嫁）も家の中で居場所を見出していたとDさんは言います。

Dさんは繭かき（繭を出荷する時に繭についた毛羽やゴミをとる仕事）の頃に流産をしかけたそうです。医者に行き「絶対安静だ」と言われたものの、家に帰ってもそうは言えませんでした。

「でも繭かきを静かにやっていて、それで救われてなんとか流産しなくてすんだの。」

Dさんは、養蚕に関しては、女性は責任を持って自立していたと言います。

「だから繭を出荷する時に出る、はねだしのくず繭とか玉繭なんかはへそくりにできた。」

また、Aさんも

「晩秋や晩々秋は女衆のホマチ（へそくり・役得）だと言ってね。この辺じゃ母ちゃんのホンマチだと言いましたが。その繭は自分で糸に引いてね、それでもってね機織りやったり、うちで着物作ったりお布団作ったり、そんなことやってました。」と養蚕には女性の役得があったと言います。

### コラム② 「家蚕～カイコ～」

養蚕農家が飼育しているカイコは一般的に「一代交雑種（違う品種を掛け合わせたもの）」で、病気に強く飼育が容易で、取繭量の多いものです。また、自然状態で一年に一度生まれるカイコを一化生種、二回生まれるカイコを二化生種、三回以上生まれるものを多化生種と言います。

カイコは生まれると4週間ほどの間に4回眠り、4回の脱皮を繰り返したあと、口から糸を吐き繭を作ります。およそ2昼夜かけて繭を作り、2週間かけて繭の中で蛹から蛾になります。



3齢幼虫



5齢幼虫



営繭するカイコ



孵化した直後のケゴ  
(この後、鷹などの尾羽で種紙から「掃き立て」て柔らかい桑の葉を与える)

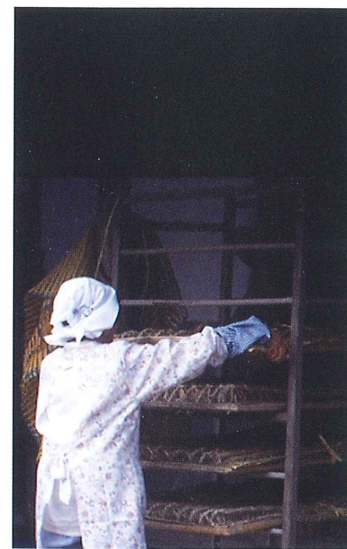


●カイコの調査には上水内郡中条村の堀内新也さんにご協力をいただきました。

### ◆◆カイコのいる暮らし②◆◆

カイコの世話 カイコはケゴから5齢に育つと、およそ12,000倍の重さになります。ケゴの時は1部屋で足りていた飼育室も、育つにつれ、家中に広がりました。カイコに占領された家の中、廊下で寝た、家族全員が1部屋に寝た、お勝手に寝た、玄関で寝た、という家も珍しくありませんでした。

カイコが小さい頃は、頻繁に「コジリトリ」をしなければなりません。「コジリ」とは、カイコがした糞尿や、食べ残した桑の屑のことです。



六尺棚に蚕カゴを入れる

カイコアミ（蚕網・サンモウ）という、カイコがちょうどくぐれるほどのアミをカイコの上に置き、その上に桑を置くと、カイコは桑を食べるためにアミをくぐって上にあがります。その後アミごと違うカゴに移せば新しい桑とカイコだけが移動できるので

「取ったコジリは庭に投げ出していた。アミやカゴ、蚕座紙は干しておいてまた使い、コジリは畑へ持って行って肥料にしていた。」（Bさん）

カイコの糞尿まで無駄なく有効に利用されていました。

子どもたちの仕事 母親や、祖母が忙しく養蚕をしている間、子どもたちも当然のように家の仕事を手伝いました。子どもにも仕事の役割があり、家族の暮らしをささえる大切な働き手でもあったのです。

Bさんが家の手伝いをしだしたのは小学3年くらいからだということです。最初は小さい弟の子守をしていましたが、おんぶできなくなると、その弟は腰に紐をつけて柱に結ばれて遠くへ行かないようにされていたそうです。ほかにも学校から帰ると、台所の瓶に水を一杯にし、畑に行っている母が帰ってきてからすぐにご飯が作れるようにキジラ（薪を置く場所）に焚きつけを用意してい

たそうです。

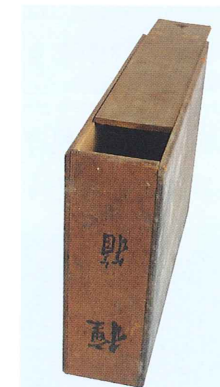
小学4年になると桑をもぎに行きました。カイコが3眠を過ぎた頃には強い葉を取る言われたそうです。馬を飼っていたので、学校から帰ると馬に運送をつけて父親と一緒に行くこともありました。



Aさんの実家は「種屋」（蚕種製造）だったので、Aさんも子どものころから種を取る手伝いをしていたそうです。カイコが蛾になって産卵したあと、「蛾箱」という箱に雌の蛾を拾いました。学校へ行く前だらうと何だらうと、家族みんなでやったそうです。拾った蛾は蚕種倶楽部（豊科新田にあった蚕種予防治務所の温出張所・母蛾の微粒子病の有無を検査した）へ持って行き、病気がないかどうか検査されました。また、蛾の種付け（種紙に産卵させること）、交尾した蛾を離す（割愛）など、子どもの仕事は山とありました。

Aさんの場合は種屋を営んでいたこともあって、蚕種の配達もしていました。Aさんは中萱（三郷）に自転車で配達していましたが、4つ上の兄は笹賀村（現松本市笹賀）まで自転車で配達していたそうです。

「まだ小学6年か高等科1年のころでした。ケゴが出始めたものを潰さないように箱に入れて自転車で持っていきました。」（Aさん）



種紙を保存した種箱（左）  
カイコの種（卵）を産みつけた種紙（下）



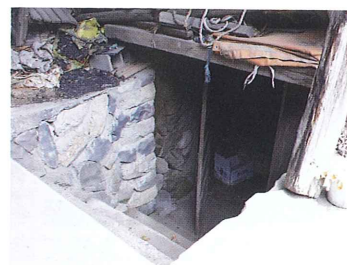


桑畑・桑むぎ カイコを飼うのに、桑は欠かせない飼料です。良質の桑がよいカイコを育てるとあって、養蚕農家は桑の育成・確保にも苦労しました。また、種屋では普通の桑ではなく、特別な「歩桑」を採りに行きました。歩桑とは扇状地の砂礫質の土壤にある桑のことで、霜害が少ないうえ、カイコに病気をもたらすカイコノウジバエの卵が少なく、また「歩がつく」と言ってカイコ蛾の産む種の数が多いと種屋では喜んだそうです。



梓川村金松寺付近（現松本市）  
（元は稚蚕所の桑園だった 平成10年頃）

実家でも嫁ぎ先でも種屋を営んでいたCさんは、歩桑を取るために、毎日歩いてオモロッパラ（小室原：現松本市梓川）へ行っていました。近くにある開墾地でも桑は採れましたが、遠くのオモロッパラまで行きました。



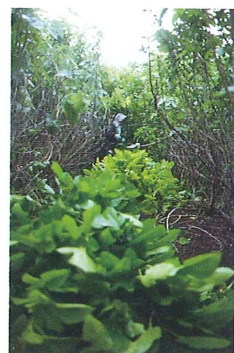
桑ムロ

半地下になっていて、壁には石が積み上げられている。桑の保存や、冬の間は貯蔵庫としても使われた。

Cさんのお宅には大きな桑ムロがありますが、カイコを大量に飼育している時には、桑ムロいっぱい保存した桑が一日で終わってしまうこともあったそうです。

カイコには雨に濡れた桑をやるわけにはいかないので、桑ムロの中に綱を張って、そこへ桑を干して乾かしてからカイコにやりました。

また、桑の種類も色々ありました。Cさんは、糸繭（糸をとるための繭）の場合は桑は何でもよかったが、種繭



桑むぎ  
（桑は一ノ瀬）

（蚕種をとるための繭）の時にはその頃新しく出た「一ノ瀬」という桑を使ったそうです。ほかに「改良ネズミガエシ」や「オオハ」という桑を使いました。

Cさんと同じく実家で種屋を営んでいたAさんも子どもの頃はやはりオモロッパラに桑をもぎにいったそうです。

「学校から帰ってきて小1時間かけて歩いたんです。稚蚕の桑を摘まなければいけなかったので、指に桑摘みをはさんで桑を採り、帰りは暗くなっただけ、姉と2人でピクをかついで帰ってきました。ケゴの時はピク2つもあれば足りました。毎日新しい桑の方がいいので、毎日もぎに行きました」



ピク

養蚕農家では、春蚕用・夏蚕用・秋蚕用とそれぞれ別に桑を管理・手入れしていました。



桑摘み爪

### コラム③ 「ウロタエ橋」

豊科は他県から蚕種や繭を買付ける仲買人が多く訪れる場所でもありました。そのため、最盛期には豊科市街に70軒の料理店が軒を連ね、81人の芸妓がいたということです。

Bさんは「豊科に繭を売りに行ったご主人が帰りに飲んで繭を売ったお金を全部使っちゃったんだって。それで「ウロタエ橋」って言うだよ」という笑い話を聞かせてくれました。

また、Aさんも売りに行くのは父の仕事だったと言います。

「それこそ女衆はおかいこを飼って、いい繭が取れたといって喜ぶだけで、あとは主人まかせだったでしょうね」



ウロタエ橋 国道147号線沿い、豊科駅入口交差点から南へ150mほど行ったところ。昔の面影は感じられない。

### ◆◆養蚕にまつわる信仰◆◆

3月の初午（豊作の祈り） 3月の初午の時期になると、その年の繭の豊作を祈って稲荷神社へお参りに行くことが多かったようです。Aさんの場合は同姓で祀る稲荷神社でお祭りをしたそうですが、豊科の「玄蕃稲荷神社」まで祈願に来る人もいたそうです。お祭りの時には参道に提灯をつけたり、吹流しをあげたり、幟を立てたりして、盛大にお祭りをしました。神社には紙に米粉で作った繭玉をのせてお供えをしました。その繭玉は今年も繭が豊作になるようにと、普通の繭玉より1回り大きく作って供えたそうです。



同姓の稲荷で配られたお札とその版木

9月の蚕玉あげ（蚕玉様へのお礼） その年の養蚕が全て終わる9月末には「蚕玉あげ」と言って、蚕玉様（カイコの神様）のお祭りをしました。10月10日のトオカンヤには蚕玉様が天に帰るから、それまでに蚕玉あげをしなければいけないと言われていました。AさんとCさんの住む野沢



三郷津島社境内の養蚕神

（三郷）には大きな養蚕神が祀られていて、9月30日頃には野沢中でお祭りをしたそうです。蚕種倶楽部には舞台が作られて、映画や寸劇、手踊り、浪花節など、様々な出し物や余興でとても楽しかったそうです。しかし、昭和10年代には戦争で青年たちは戦地へ

行ってしまい、Cさんは「戦争でみんななくなっちゃった。1度なくなるともうダメだね」と寂しげに言われました。

また、野沢では蚕玉様にお供えとしてお餅を捣きました。小さいお飾り（鏡餅）を作って、蚕玉様に供えました。蚕玉様の台座のところには小さなお飾りがたくさん供えられ、1つ大きなお飾りがある、それはおそらく氏子総代が供えたのだろうとAさんは言います。

人手を頼んで養蚕をしていた家では捣いたお餅をあんころ餅にしてお重に入れて、手伝いしてもらった人へ一重ずつ配りました。

「この辺はみんなお餅搗いたね。蚕玉あげで、どこでもお餅搗くって言ってね。」（Cさん）

### ◆◆繭の出荷◆◆

養蚕農家の駆け引き 掃き立てから1ヶ月ほどで、カイコは繭になります。繭の出荷はどの養蚕農家にとっても心浮き立つものでした。「田んぼは年に1度しかお金にならないけど、おかいこ様は繭を売るときに現金になるからね」と、多くの方が口を揃えて言います。



北穂高の蚕種製造家の蚕室（昭和初期・個人蔵）

Aさんの実家では、一日市場（三郷）に売りに行ったり、「マルメ（しめ）」（松本の製糸工場）に売りに行ったそうです。しかし「こっちよりあっちの方が値がいい」という噂を聞くと、違う製糸工場へ持って行くこともありました。豊科の「マルアイ」（丸合生糸施設組合）へ持って行ったこともあったようです。

繭を出荷する時は、布製の「繭袋」へ繭を入れ、それを竹で編んだテッポコ籠へ入れて自転車の両脇に下げて持っていったということです。やがて、農協へ出荷するようになると運送で運ぶようになりました。





テッポコ籠

昭和22年（1947）に農業協同組合法が公布され、農協が設立されると、農協を通してしか繭を売ることができなくなりました。

しかし、養蚕農家と製糸会社などの結びつきは強く、農協を通さずにこっそり繭を売

る農家もありました。農家にとっては少しでも高く繭を売りたいのだからと、養蚕技術指導員をしていたEさんが語ってくれました。

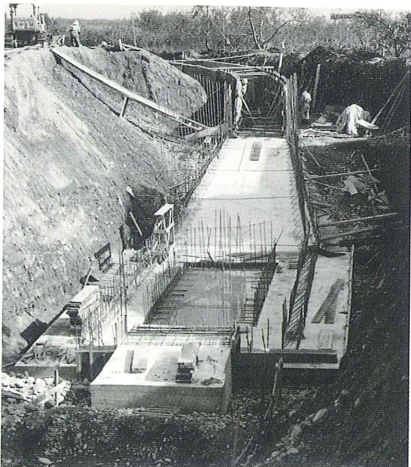
### ◆◆消え行く養蚕・移りゆく暮らし◆◆

**繭価の暴落と農地の開発** 明治中ごろから盛んになった養蚕は、大正から昭和初期にかけて最盛期を迎えます。しかし昭和4年（1929）には大恐慌による繭価暴落、太平洋戦争中から戦後にかけては食糧増産政策による桑畑の減少、戦争による人手不足などから平地では養蚕をやめ、桑畑を水田や穀物畑こくもつに変える農家も少なくありませんでした。

一方、山麓さんろくでは養蚕を続ける農家もありました。繭の生産費（コスト）を抑えるために稚蚕所を設け、カイコの共同飼育をし、農家の負担を減らす努力がされました。

しかし、「ちゅうしんたいら中信平農業水利事業」によって山麓でも農業用水が確保されると、果樹栽培が急激に進みました。それまで養蚕を続けていた農家の多くが、この開発で養蚕を断念しました。

Eさんは養蚕技術指導員として、養蚕業を盛り返そうと考え、桑を植え直したりしましたが、



中信平農業水利事業の様子（昭和46年）

「りんごを作るようになってからは消毒で桑がやられて、結局みんなりんごになってしまったよね。」

と振り返ります。

Aさんも、中信平農業水利事業の時に桑をみんなこいで（抜いて）しまって、桑畑が激減したと言います。また、桑畑の後にできたりんご畑の消毒が桑にかかると、その桑を食べたカイコがみな死んでしまったと言います。

Aさんは養蚕をやめた後もカイコの夢を見るそうです。

「夢でおかいこに桑くれるの忘れちゃった、大変だ、なんてこともあったりね。そのくらい染み付いてるんですよ。」

**豊かな暮らしの影で** 平成10年頃まで安曇野ほそほそで細々と続いていた養蚕も、現在営む農家は一軒もありません。安曇野だけでなく、養蚕によって栄えた地方のどこでも養蚕はなくなりつつあります。それは、生産費に収入が見合わないことや、農地の開発が進み、桑園が果樹園や水田に転化したことなど、いくつも要因が考えられます。

しかし、なによりも、私たちの生活様式が変わってしまったことが1番の理由ではないでしょうか。私たちは日常生活で着物を着ることもありません。自分でカイコを育て、生糸を取って織物をしなくても簡単に服が手に入ります。

歴史的には100年に満たないほどの短い期間ですが、確かに養蚕が安曇野の人々の暮らしを支えていたことを知ることができます。豊かな暮らしがもたらしたものがあ一方、失ったものがあるのかもしれない。

#### ◆◆編集後記◆◆

駆け足のように、安曇野での養蚕の歴史・おかいこ様とともに暮らした様子をかいま見てきました。

カイコを見たこともなかった私自身も、今回の展覧会を準備する中で養蚕に触れ、カイコの不思議さと魅力を知りました。今回は取り上げられなかった生糸や織物については今後の課題とし、さらに養蚕の奥深さについてご紹介できれば、と考えています。(M)

編集 安曇野市豊科郷土博物館

発行 財団法人豊科文化財団

安曇野市豊科郷土博物館

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8

TEL・FAX 0263-72-5672

URL : <http://toyohaku.jugem.jp/>